第501MS戦記

木ノ本悠里

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

地球とよく似ているが魔力が存在する世界の２０世紀初頭、突如出現した異形の敵「ネウロイ」の圧倒的な戦力と瘴気の汚染による大陸侵略が進んでいた。ネウロイが何が目的でなぜ襲ってくるのか、誰にもわからなかった。

人類はこれに対し二つの戦力を出した。

一つ魔導エンジンによる飛行脚「ストライカーユニット」を駆ることの出来る魔力を持つ少女「魔女（ウィッチ）」である。

もう一つはウィッチと対を成す存在、男性のウィッチ「魔術師（ウィザード）」

彼ら用に開発された、同じく魔導エンジンを搭載した機動人型兵器「モビルスーツ（通称ＭＳ）」である。

この物語は激化するネウロイとの戦いの中戦場を又に駆ける熱き魂を男達と空を守る為立ち上がった少女達の戦いの記録である。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 6
第3話 …… 15
第4話 …… 19

第1話

時は１９４３年、舞台は横須賀から始まる。
木ノ本悠里中尉は横須賀軍基地司令部に呼び出され司令部に向かっていた。
（さて、指令部に呼び出されるなんて一体どんな要件なんだろう？）

そんな事を考えていると指令室についた。
扉を開けるとそこには二十代後半と言った具合の落ち着いた感じの女性がソファーに掛けていた。
「木ノ本悠里中尉只今出頭しました」
「長旅お疲れ様。そこに掛けて」
と女性が言うと悠里はゆったりとソファーに掛けた。
先に口を開いたのは悠里だった。
「小泉中佐、俺を呼んだ理由は何です？わざわざ本国に呼び出すとはちょっとした理由ではないですよね？」
小泉中佐と呼ばれた髪の長い女性は少し間をおいて答えた。
「そうね、私があなたを呼び出すのは珍しい事かもね」
「それで本題は何です？」
「あら、いきなり本題？まあ、いいわ。あなたに伝える事は２つ。まずはあなたには今日付けで大尉昇進よ、おめでとう。昇進の理由はやっぱり、あの技術ね」
「ですが、あれを実戦で使うにはまだまだ改良が必要ですよ？」
「上は少しでも士気が上がるならなんでもいいのよ」
「そうゆうものですか？階級なんて最前線に行けばあってないものなのに」
「そうゆうものよ」
「それはそうと何で今階級をあげる必要が？」
「それは二つ目の案件につながるわ、あなたにはブリタニアの第５０１統合戦闘航空団に転属になったの。」

「ブリタニアに、ですか？」
「そうよ、大尉、あなたの仕事を考えみて」
「なるほど、要するに最前線のブリタニアに行きあれの完成を目指せということですか。」
「そうゆうこと、これはあなたにしかできない事よ。それにあそこにはあなたの幼なじみが居るんじゃなかった？」
「そういえば美緒の奴５０１に居たんだっけ」
　彼は扶桑のサムライと呼ばれる坂本美緒少佐と幼なじみであった。
「あそこには上士官がゴロゴロ居るわ、それに対応するためにあなたには大尉になってもらったの。まああなたの場合技術士官みたいな物だけどね。それともう一つ、あなたにはしてもらうことがあるの」
「何です？」
「伊達に大尉になったわけではないのだから仕事は増えるわよ。５０１はまだＭＳを部隊に取り入れて日が浅いの、そこであなたの出番なわけ」
「そこで新型のテスト及びブＭＳとウィッチとの基礎戦術を指導しろと？」
「そうゆう事よ」
「はぁ、よりによってＭＳ部隊長ですか」
「それもひとえにあなたの技術の高さを上層部がきちんと判断したものだから少しは自信を持ちなさい。
　それじゃ、もう一度任務を説明するわよ、木ノ本大尉、あなたは三日後に横須賀港を出る遣欧艦隊の航空空母赤城に乗ってブリタニアの５０１統合戦闘航空団に転属を命じます。詳しい説明は現地の指揮官に聞いてください。以上です」
　悠里は多少呆れながら
「はぁ、分かりやした、木ノ本悠里大尉任務を受領しました。」
「あなたの活躍を期待しているわ、頑張ってね。機体のスペックは今から渡す資料に全部乗ってるわ、今から行けば多分赤城に搬入しているタイミングね。一応、顔を出しておいてねそれじゃ、いってよし」
「分かりました、中佐の配慮に感謝します。それでは失礼します」

と言うと悠里はソファーから立ち上がり指令室をあとにした。
「ほんと、あんたの技量の高さに私だって驚かせられるわよ。しかもとんでもない物作ってくれちゃって、やっぱり血は争えないわね」
人のいない部屋で一人呟く小泉中佐であった。

「よし！いいぞ！搬入してくれ！」
威勢のいい声が赤城の甲板に響く。
早速、悠里は自分の乗る機体を見に来ていた。
悠里は元は整備兵であったがある出来事によってウィザードになった。それからは上層部にＭＳ特務部隊に配属されテストパイロットとして様々な戦場を渡っていた。テストパイロットであるため決まった機体には乗らないそれが悠里であった。
「へー、こいつが俺の乗る新しい機体か」
そんな悠里の姿に気がついた整備兵の一人が声をかけた。
「えーと、木ノ本大尉でよろしいですか？」
「はい、本日付けでこのＭＳのパイロットになった木ノ本悠里大尉です。よろしくお願いいたします。であなた？」
「申し遅れました、赤城の整備チーフの山本大介上等兵であります」
と名乗った整備兵は悠里よりもかなり年上で軍服をかなり着こなしていた。
「山本上等兵、俺の前では敬語は抜きでお願いします、仮にもこれからブリタニアまで行く仲ですし」
「分かりました上官がそう言うのであれば」
「ありがとうございます、山本さん。それで機体は？」
「ガンダムならあそこだ、大尉」
と山本が指を指したには、白いＭＳがあった。
「あれが、ガンダム…」
「ああ、形式番号ＲＸ―７９［Ｇ］陸戦型ガンダム。
それがあのＭＳの名称だ」
「あいつが前線で噂のガンダムですか？」

「いや、やつはちと違う、統合軍のＶ作戦において開発されたＲＸ―７８―２の余剰パーツを使って作られた」
「余り物ですか？」
「余り物だからといって甘く見ると痛い目見るぞ。そもそもガンダムはＭＳとしては破格の性能を持ってる、それはガンダムのパーツがザクやジムより質の高いの使っている。だから余剰パーツも高水準なんだ。大尉だってテストパイロットをやっているんだからＭＳの操縦技能は高い、さらに陸戦型ガンダムは性能が高いからテスト用の機体にはもってこいだ、だから中佐は大尉にこいつを任せたのさ」
「なるほど、山本さん。俺はこいつに早く乗りたくなりましたよ！」
「そうこなくっちゃな！あんたの操縦技能に期待してるぞ。こいつの整備はしっかりしておくから、大尉はしっかり休んでな」
「ありがとうございます、山本さん、それじゃ、頼みます」
と言うと悠里は港を後に宿舎えと向かった。

～三日後～
「ふう、ようやく出発か。いよいよだな」
悠里は赤城の前に来ていた。
「あと少しで出港かー、早いもんだな。今度はゆっくり休暇取ろ」
とぼやきながら赤城に乗ろうとすると悠里はあの幼なじみの姿を見つけた。
「あれ？美緒か？」
見つけた幼なじみに歩いて行くと見慣れぬ少女がいた。
先に気づいたのはその少女だった。
「坂本さん、あの人は？」
坂本と呼ばれた女性が振り向いた。
「お前！悠里じゃないか！どうしたんだ、こんなところで？」
「美緒、いろいろ話すことがあるのは分かるけどそこの女の子は一体？」
「そうだな、まずはこいつは宮藤芳佳、あの宮藤博士の娘さんだ。こな

いだ、博士から手紙がそうで博士を探すと言うことで私が連れてきた。」
　宮藤と呼ばれた女の子は元気に悠里に挨拶をした。
「宮藤芳佳です！よろしくお願いします！」
「芳佳ちゃんか、元気だな、俺の名前は木ノ本悠里、よろしく。美緒とは幼なじみなんだ。君のお父さんのことは本当に尊敬しているよ」
「そう、ですか、」
　少しだけ寂しい顔をした芳佳だった。
「えーと、坂本さんと幼なじみなんですか？」
「ああ、家が近所でな」
　少し置いてきぼりをくらいかけた美緒が咳払いして会話に入る。
「ところで悠里、お前は何でこんなところにいるんだ？」
「ああ、俺は美緒のところに転属になった」
「お前が！いや、びっくりだなまさかお前が来るとはな、だがお前が来てくれるなら心強いな。ははははは！」
　と持ち前の豪快で笑い飛ばす美緒だった。
　と悠里は腕時計をみた。
「おい、二人ともそろそろ時間だぜ」
「ん、そうだな、行こう宮藤、悠里」
「はい！」
「おう！」
　そして三人を乗せた赤城を含む遣欧艦隊は横須賀を離れブリタニアに向かった。

第2話

～赤城甲板～

「ふぅ、やっとこの長い船旅も終わりか」

「そうですね、もうすぐブリタニアが見えてくるそうですよ」

悠里は今、赤城の甲板の上で芳佳ともに甲板掃除を手伝っていた。

既に1ヶ月近く船旅をしていた悠里はMSのテストをしているがその他の時間はそれなりに暇で料理や掃除なんかを手伝っている。そうした生活を送るにつれ芳佳と会う機会が多くあり、悠里は芳佳と次第に打ち解け今では名前で呼び会うようになっていた。

そんな甲板に艦のアナウンスが鳴り響いた

「宮藤、悠里、甲板にいるな？これから飛行訓練をやるから見ておけ」

「おお、美緒の飛行が見えるのか、楽しみだな」

「私、ウィッチが飛ぶところ見たことないです」

「見たことないのか、実は俺も他のウィッチはたくさん見てるんだけど美緒が飛ぶところは見たことないんだ。まあ、部隊が違うから無理だったんだけど。美緒はかなりのベテランだからからウィッチを目指すならかなり参考になるな」

というと芳佳は少し顔をうつ向けて悠里に抗議するように言った

「私、戦争はしませんから」

「そうか…そうだよな、悪かった」

悠里は芳佳の父、宮藤博士が亡くなった事から芳佳が極度の戦争嫌いなってしまった事を美緒から聞いていた。

重苦しい空気が続くかと思われたが中央エレベーターが上がって来るのに気づいた悠里は芳佳に声をかける。

「お！芳佳、美緒が来たみたいだ」

芳佳が振り向くとちょうど発艦エレベーターから発進ユニットと共に美緒が上がって来た。　　悠里と芳佳は発進ユニットの上

に乗っている美緒に近寄った。
「美緒、俺はお前の飛行を見るのは初めてなんだ、じっくり見学させてもらうぜ。それに芳佳はウィッチが飛ぶ所を見るのが初めてなんだとよ」
「人にみられるのは慣れないんだがな。二人とも私の飛行をよく見ておけ、特に悠里！お前は今後の参考の為にもな。よし、それではいくぞ！　坂本美緒、飛行訓練を開始する！」
　そう言うと美緒は勢いよくストライカーユニットに足を入れた。そして魔力を出すと使い魔のドーベルマンの耳としっぽが飛び出る。そして　魔導エンジンが始動しプロペラが出て一気に回転を始めた。そして勢いよく大空に飛び出した。
　さっきとは打って変わり興奮する芳佳。
「わぁー！すごいですね！悠里さん！」
「ああ、そうだな！」
　悠里も幼馴染みの飛行を見て多少興奮していた。
（なるほど、やっぱりハイレベルな動きなんだ、あれが経験に裏打ちされた飛び方か）
　～数十分後～
　美緒は飛行訓練を終えて甲板に戻って来た
　悠里と芳佳は降りてきた美緒に声をかけた。
「お疲れ美緒、やっぱスゲーよ、美緒は飛び方に無駄がないな！」
「すごいです！坂本さん！ウィッチってあんな風に　飛ぶんですね。格好いいです！」
　二人にそう言われ笑う美緒
「ははは、そうか、そうか、格好いいか！」
　そうこうしていると艦全体にアナウンスが響いた
「木ノ本大尉、至急格納庫に来てください。
　整備チーフがお呼びです」
「ん？なんだ？」
「わからないが早く行ってこい。整備連中を待たせると後が怖いからな」

「ああ、それじゃ、美緒、芳佳、また後でな」
「はーい、頑張ってくださいね、悠里さん」
「悠里、終わったら昼にしよう待ってるぞ」
「おう！」
　そういうと悠里は格納庫に向かった。
　悠里が陸戦一級装備を付け格納庫に到着するとガンダムを整備している山本が悠里に気付き声をかけてきた。
「すまんな、ちょいと機体の微調整を頼もうと思ってな。整備にお前さんを呼ぼうとしたんだ。調整はお前さんがいないと話ならんからな」
「しょうがないですよ。ＭＳは魔法力がないと動きませんから。それでどこの調整を？」
「それが、さっき機体の調整をしてたんだがどうもエンジンの調子がおかしくてな。一応直したんだが魔法力を流してみてどうか判断することにしたんだ。向こうに着くまでに直しておきたい。向こうの整備屋にいい状態で渡したいからな」
　因みにＭＳのエンジンはジェット機構になっており、それにより機体が大型になっている。

「わかりました。変換機構と武装の調子はどうですか？」
「今のところは大丈夫だ。だがあれも手を加えるつもりだ。なんとか整備の方は慣れたがビームサーベルは粒子展開が長くもたない」
「整備屋からはどうですか、あれは？」
「俺も説明資料を見たときは驚いたな、ＭＳがビームを扱えるなんてな。武装も確かに威力がある。技術としたはいいかも知れないが整備する身としては機体の複雑化は大変だな」
「そうですか…でも、まだ試作段階ですし、現状は近接用の武装しか出来てません。上手くいけば小型化もいけるかもしれません。とりあえず当面は任務で機構の完成と実用性のテストをする予定です」
　今、二人が話している機構とは扶桑を中心に最近開発が始まった魔法力をビームに変換する機構の事である。

「う～む、話しても進まんな。とりあえず、お前さんも整備の出なら自分の機体を大事にしろよ？ＭＳはあんまり数がないからな。さてぼちぼち始めるぞ、お前ら準備いいか！悠里もコクピットに入ってくれ」
　悠里と整備兵一同に準備を促す山本。
「了解、さーて、やりますか！」
　そう言うと悠里は意気揚々とコクピットに入った。
　一方その頃、甲板では芳佳と美緒がいた。
「何ですかね、急な呼び出しって？」
「わからないが多分ＭＳ関連だろうな。あいつはパイロットだからな」
「悠里さんも、坂本さんも、やっぱり戦争するんですね」
「それが私達の使命だからな。あいつも私も力ない人々を守る為に戦っている」
「誰かの為に、一人でも多くの人を助ける為にその力を使え、か」
　一人呟く芳佳だった。
　そんな中ぼんやり海を見つめた芳佳がついにブリタニアの大地を見つけた。
「あれが…ブリタニア。あれ？なんだろう？」
　と何か見つけた芳佳
「どうした、宮藤？」
「何か、こう、黒いものが見えたような気がするんです」
　その一言に顔色を変える美緒。
「!?どこだ！宮藤！」
「あ、あそこです」
　若干驚きながら艦隊の右前方を指差す芳佳
　美緒は固有魔法の魔眼を使い黒いものを探したすると艦隊の右斜め前方に大きな黒い影を見つけた。
「ネウロイか！敵襲！十二時方向、四千！」
　美緒の一言に一気に船員達があわただしく動き出した。
「あれが…ネウロイなの？」

芳佳にはかろうじて見える程度影がさほどの
脅威に感じられなかった。
しかしそれはネウロイがビームを放ち護衛の駆逐艦の一隻があっさり落とさせれる事によりそれは儚く壊れた。
「宮藤、こっちに来い！」
と言って芳佳を美緒は艦内の医務室に連れて行った。
その頃、ネウロイ出現を受け艦内は緊張感に包まれた。
艦橋では杉田艦長と樽宮副長が迎撃指令を送っていた。
「ブリタニアに僅かと言うところで！、まだだ！何としても我々はブリタニアに物質を送らなければならんのだ！
戦闘機隊を出せ！坂本少佐、木ノ本大尉に連絡急げ！、モビルスーツもモビルスーツも出す！
それとブリタニアの５０１に急ぎ応援要請を！」
「しかし、艦長！あれは試験機体です！」
「やむを得ない！我々がやられるわけにはいかん！」
「艦長！格納庫の山本上等兵から連絡！ＭＳが整備中に出撃に時間がかかるとの事です！」
「なにぃ！仕方ない、坂本少佐の発進を急がせろ！５０１の援護が来るまでなんとしてももたせるのだ！」
ハンガーでもネウロイ出現と聞き整備を急いでいた。
「おいおい…マジかよ！こっちにはロクな装備もないってのに！山本さん、エンジンはどうですか！」
「クソっ！まだ必要出力まで足りない！もう少し待ってくれ！」
遣欧艦隊は今まさに危機に直面していた。

その頃、５０１統合戦闘航空団ではリベリオン出身の「グラマラス・シャーリー」こと、
シャーロット・Ｅ・イェーガー大尉と５０１では最年少のロマーニャ出身のフランチェスカ・
ルッキーニ少尉が水着姿でデッキチェアに寝そべっていた。
「あ！帰って来た。」

「お～、お帰り～」
夜間哨戒から帰って来たのはオラーシャ出身の
サーニャ・Ｖ・リトヴヤク中尉とスオムス出身のエイラ・イルマタル・ユーティライネン少尉。
ここ５０１は各国の精鋭を集めた連合部隊である。
「今は戦闘待機中です。もう少し気を引き締めたらどうですの？」
二人の傍にやって来たのはガリアの出身で貴族であるペリーヌ・クロステルマン中尉。
貴族出身のせいか自信家で気が強いのがたまにキズである。
「別に大丈夫だろ？解析じゃ後二十時間は来ないらしい。中佐からＯＫ貰ってるし、それ暑いし～、別に見られても平気だしね」
ペリーヌの嫌味もシャーリーは気にしない。
「ペリーヌは見られたら困るもんね～」
シャーリーの胸とペリーヌの胸を比べ、ニシシ
と笑うルッキーニ。
「し、失礼ね！余計なお世話です！」
澄ました表情を見せるペリーヌ。
自分でも自覚はしているらしい。
「もうすぐ坂本少佐が戻られます。そうしたら
一番にあなた方の行動を報告させていただきますわ！」
「チクる気？感じ悪いね～」
シャーリーとペリーヌは前々から反りが合わない。
シャーリーの陽気な性格がペリーヌの癪にさわり、ペリーヌの貴族ぶった言い方がシャーリーには嫌味に聞こえるようだ。
「ぺたんこのくせにえらそ～」
ルッキーニもペリーヌの偉そうな態度が気に入らない。
「それは関係ありません！それにあなたには言われたくありません！」
三人が言い争いをしていると基地全体にサイレンが鳴り響いた。
「嘘だろ!?敵襲！」
「でもでも予報じゃまだ来ないって」

「実際、敵が来てますわ！でも早すぎる！」
そしてペリーヌは先ほどとは全く違う顔つきでハンガーへ走りだし、シャーリーとルッキーニは軍服に袖を通しながらペリーヌの後を追いハンガーへ向かった。
「どうして…こうなっちったんだろう？私、お父さんに会いたいだけなのに」
赤城の医務室で芳佳は、ぼんやりと考えいた。
激しい振動と轟音、またあのネウロイの攻撃である。ネウロイがビームを打つたび護衛の駆逐艦が撃沈していく。
ドウッ！またしても大きな振動が赤城を揺らしていく。
（お父さん、私、怖い！）
芳佳はギュッと強く目を瞑っていた。すると耳から美緒の声が聞こえた。
「大丈夫か、宮藤？」
「さ、坂本さん!?」
「どうやらインカムはちゃんと機能しているようだな。しかし今しか話せん。もう一度使う時は本当に困った時に使え。いいな？」
美緒は芳佳を医務室に連れて行く途中芳佳にインカムを着けて置いた。今、それが上手く機能しているようだ。
「はい…」
「心配するな、お前達には指一本触れさせん」
「戦うんですか、あれと？」
「それが私達、ウィッチの任務だからな」
美緒はおどけて言った。
しかし芳佳でさえネウロイとの戦いは一歩間違えれば死に至る事を容易に理解できた。だからこそかける言葉がなかった。
「あの、私…私…」
「いいか、宮藤、お前は決してそこから出るなわかったな。」
強めの口調で美緒は芳佳に言った。
「でも…」

「大丈夫だ、ここには私と悠里がいる。安心して待っていろ」
今度は安心させる様に美緒は言った。
「だああ！何で出力が上がんないんだ！」
格納庫では悠里や山本が急ピッチで整備をしていた。しかしエンジンが新型のためか思ったより整備が進んではいなかった。
そこに通信機に張り付いていた整備兵が艦橋からの通信を伝えた。
「艦橋より連絡！坂本少佐、及び飛行戦隊、出撃したとの事！」
「クソっ！まだ相手は大型ネウロイなんだ！美緒一人で支えられるわけないだろ！早くなんとかしねーと！山本さん！そっちはどうですか！」
コクピットで魔法力を流している悠里は機体のバックパックの魔導エンジンを調整している山本に大声で聞く悠里。
「駄目だ！エンジンの出力がまだ上がらん！」
どうやら山本の方をうまくいっていないようだ。
「なんでもいい！飛べさえすればいいです！」
「わかってる！俺達だって死にたかない！お前ら！何としても、こいつを出すぞ！」
山本は整備員を叱咤する。

一方、先ほど出撃した美緒もネウロイ相手に苦戦していた。
「くっ！まるでハリネズミのようだな。」
美緒は大型ネウロイを相手にしながら違和感を
感じていた。
（こいつ、上部に発射器官があまり見えない。
地上攻撃に特化しているのか？）
しかしネウロイはビームを乱射し、美緒に考える隙を与えない。シールドでビームを防ぐ美緒の脇から戦闘機隊がネウロイに接近したがネウロイのビームが戦闘機隊を叩き落としていく。
戦闘機はウィッチのような戦闘軌道やＭＳの様に強力なシールド

を張れるわけがない。ネウロイにとって格好の的である。
なんとかパイロット達は脱出に成功していた。
「馬鹿者！死にたいのか！」
叫ぶ美緒。
「ここは私に任せて、戦闘機隊は援護に専念
しろ！」
そこに赤城の甲板から上がった信号弾が上がった。美緒はそれに
気付き呟いた。
「援護が来るまで二十分か…宮藤の為にも耐えてみせる！」
美緒は気合いを入れネウロイに突撃していく。
「坂本さん…戦ってる。」
芳佳は医務室から戦いを見ていた。
（私は何もできないの…）
戦闘は美緒の不利が続いていた。
窓から目を剃らす芳佳。
しかし芳佳の目に薬瓶や包帯が目に入った。
（ある！私にも出来ることが！）
芳佳の目に決意の光が宿った。

第３話

～パーティーナイト～

俺は５０１の司令室にてミーナから部屋割りや規則についての説明を受けていた。

「あなたの部屋は寮の一番右端になるよ。お風呂は時間をしっかり守ってちょうだい。鉢合わせだけは勘弁して欲しいわ。パーティーは坂本少佐が帰って来てからだから、今は自室でゆっくりして構わないわ、時間になったら呼ぶから安心して」

「ああ、そうさせてもらうよ。今日はいろいろあったからな、少し休みたいぜ」

そう言い俺は司令室を出ていった。

誰もいなくなった部屋でミーナが少しため息をついた。

「状況は変わって行くわね、５０１にもＭＳが配備されウィザードが来た。それでもあなたみたいな人は増やしたくないわ、クルト」

ミーナは机に飾られてある写真をただ見つめていた。

俺はとりあえず、寮で休む事にした。

「さぁて、とりあえず休むか」

部屋に着くなり、ベッドを倒れこむ。

「遂に来たんだな、ブリタニアに。俺はここで何が出来る……いや、やめだ、やめ。俺は出来る事があるから来たんだ」

俺は今更ながら感傷に浸っていた。そして俺は襲って来た睡魔に抗えず意識を閉じた。

～夜～

「……い、起き……り、……ろ」

「…んん、…んあ、あと、２分……」

「起きろーーーーーーーっ！」

「ぎゃあああああああ！」

俺はいきなりの大声で目を覚ました。

「な、なんだ!?」

「全く！いつまでお前は寝ているんだ！」

そこには美緒がいた。
「ったく、いきなり怒鳴ることはないだろ…」
そう、俺を起こしに来たのは美緒であった。
「文句は受け付けない！着替えて早く食堂に来い、みんな待っている」
「へいへい、了解だよ」
俺は寝起き特有のだるさを引きづりながら食堂に向かった。
時刻は夕暮れ
「おお！これは！」
美緒と一緒に食堂に来てみると様々な料理が出されておりミーナと何人か隊員がいた。
「来たわね、さて、我々５０１統合戦闘航空団にもついにウィザードが着任しました。それでは彼の着任を祝ってパーティーを開催します。まずは主役の自己紹介ね。さぁ、どうぞ？」
俺はミーナに自己紹介を振られた。
「ああ、この度、５０１統合戦闘航空団に配属になった木ノ本悠里大尉です。正直、最前線に来てみて自分に何が出来るかわかりませんが俺は一生懸命頑張るのでよろしくお願いします！」
「まぁ、そんなに気張んなよ。楽に行こうよ」
そう言ったのはオレンジ色の髪をした女の子であった。
「あたしはシャーロット・Ｅ・イェーガー。階級は大尉。気軽にシャーリーでいいよ」
女の子はシャーリーと名乗った。
そして、年少のウィッチ達が俺に寄って来た。
まず、その内の一際元気そうなウィッチが俺に話しかけて来た。
「あたしはフランチェスカ・ルッキーニだよ！
ねぇねぇ、悠里って、呼んでいい？」
「おう、よろしくなルッキーニ」
続いて、金髪の気が強そうな奴が来た。
「私はガリア空軍所属のペリーヌ・クロステルマン少尉です。これからよろしくお願いいたしますわ」
「よろしくな」

さらに、気の弱そうな子が来た。
「ブ、ブリタニア空軍所属のリ、リネット・ビショップです。よ、よろしくお願いします！」
「そんなに気張んなくていいぜ、これからよろしくな」
「今居る人達は挨拶が済んだようね」
「ミーナ、他の奴はどうしたんだ？」
俺が聞くと少し苦い顔をしたミーナ。
「そ、それは」
「バルクホルン大尉はこんな会に出る気はないと言ってハルトマン中尉もそれについて行ったようですわ」
返答に困っていたミーナの後ろにいたペリーヌが答えた。
「因みにあと二人いるがそいつらは夜間哨戒で出ているんだ」
そう付け足す美緒。
「あ…そうなの…」
多少、ショックを受けた俺。
「ま、まあこれから仲良くして行きましょうねとりあえず、今日はお開きということでいいかしら」
気まずい空気をなんとかしようとミーナが言う
「あ、ああ」
なんとも言えないパーティーであった。
～その後～
俺はなんとなく落ち着けず一人で談話室にいた
そこに美緒がやって来た。
「どうした？お前一人で」
「ちょっと、寝れなくてな」
「そうか。お前に言っておく事がいくつかあるんだ」
「なんだよ？」
「まぁ、他の奴とはこれから仲良くして行けばいい、だがみんなウィザードは初めてだからな信頼は勝ち取るしかない。特にお前をよく知らないバルクホルンやハルトマンはな」
「ああ、やってやるさ」

「それと、宮藤が入隊することになった」
「ほんとか！それ」
「ああ、本人がそう言ったんだ」
さすがに俺も驚きを隠せない。
「あいつは私が鍛え上げてやる。心配するな」
「そうだな、俺は俺のすべき事をするだけだ」
俺は決意を新たにした。

第４話

パーティーの翌日、俺はミーナの命令で三日間の休暇をもらった。
そして、今は格納庫に向かっている途中だ。
「まだまだ、チームを動かすのは時間が掛かるな。チーム分のＭＳも来てないし」
なんだかんだぼやきつつ、俺は格納庫に着いた。
「へぇー、なかなか設備が整ってるな。これなら連日の出撃でも大丈夫か」
とか言っていると白髪のおっちゃんが入って来た。
「おう！お前さんが新しく来たＭＳチームの隊長か？」
「ああ、はい。ＭＳ小隊隊長の木ノ本です」
「そうか！俺はここの整備主任のボブ・ロックだ！よろしくな！」
俺に握手を求めてきたボブさんに俺はしっかり握手をした。
「はい！よろしく頼みます！」
「ああ！出撃の時はいつでも呼んでくれ、武装の変更から機体のメンテナンスまで何でもこなしてやる！」
そこにミーナがやって来た。
「悠里、あなたに指令部から連絡が来たから一緒に連絡室に来て」
「ああ、わかった。それじゃボブさんこれで」
「そうか、紹介したい奴らがいるから、また後で来てくれ」
「はい、わかりました」
俺たちはハンガーを後にして連絡室に行った。

～連絡室～
「連絡は連合本部のコーウェン准将からね」
「准将から？一体なんだ？」
不思議に思いつつ、俺は通信機をとった。
『君が木ノ本大尉だね。初めまして、私は連合本部のジョン・コーウェン准将だ。早速だが君に頼みたい事がある』
「自分にですか？」

『ああ、ウィッチとＭＳの共同戦線は世界各地にあるが実際に連携を取れているのはあまりに少ない、だからこそ出来る限りのデータが欲しいのだ。そのために君の隊はテストケースとして試験機体を送る』
「試験機体をですか？」
『そのための人員は送るのでそれは大丈夫だ。
　そして、さらにそこは中隊規模での作戦行動をしてもらう。パイロットをあと６人ほど送るから合わせてやってもらう』
「具体的に自分はどうすれば？」
『君には部隊長をしてもらう』
「えぇ！自分がですか!?」
『そんなに大変ものではない。実際には３チームほど作ってもらい、各隊を率いてもらい出撃前に機体の選択、チームの編成をしてもらう』
「な、なるほど……わかりました、なんとかします」
『そして、もうひとつ、君にはＶ作戦の後期計画である、ＲＸ計画への参加を命じる』
「ＲＸ計画とは一体？」
『Ｖ計画は今まで企業に頼っていたＭＳの開発を連合軍で統合し、新たにＭＳを新設することだ。
　その過程でできた、ＲＸ―７８―２ガンダムのスペックが非常に良かったので、ＲＸ計画ではさまざまな面で特化したガンダムを開発することだ。
　もちろん、ウィッチとの連携を考えいる。先ほど言った試験機体はこれをテストベッドにガンダムを開発するためのデータを取ってもらうためだ。データを取る際だがウィッチにも乗ってもらいたい』
「ウィッチのデータも取れと？」
『ああ、そうしてもらえると助かる。ＭＳの開発にもストライカーを開発にも使えるからな』
「それについては自分の判断でウィッチを選抜をしていいんですね？」
『ああ、ＭＳ隊隊長の君に一任する』

「わかりました、ベストを尽くします！」
『よく引き受けてくれた。早速だが近々、射撃重視の機体を送る。私も目を通したが癖があるから頑張ってくれ。ブリタニアの命運は君達にかかっている。頼んだぞ』
「は、はい！」
「通信、終了しました」
通信兵がそうゆうと通信が切れた。

「大変な事になったわね」
通信を聞いていたミーナが若干渋い顔をしている。
「あ、ああ、これまた大変なことを仰せつかったもんだ…」
「私も協力するから、頑張りましょう」
「そうだな、じゃ、俺は格納庫に戻るわ」
そういい、俺はまた格納庫に戻ることにした。
ボブさんが紹介したい奴って誰なんだ？
俺は通寝室から格納庫に移動していた。
「はぁ、新型のテスト、機構の調整、そして新チームか、やることが多くて、参るな…」
とぼとぼ、歩いていると、向こうから髪を二つにまとめた女の人が歩いてきた。
その人は俺の知らない人だった。
通り抜けようかとすると声をかけられた。
？「おい、貴様、こんな所で何をしている」
悠「何って…」
？「ここは関係者しか入れないはずだ」
悠「あのね、俺はウイザードだっての」
？「なんだと！貴様みたいな奴がか！」
？「あり得ん、そんな格好で軍人だと!?」
そう言われる俺の格好はTシャツにジーンズという普通の格好であった。
悠「いや、だって俺、非番だし」

？「信じれんな、お前が軍人だと思えない。
さっさと一般人は帰れ！」
悠「何ぃ？出会い頭にそんな事を言われる覚えはないんだが！」
俺と女の人は今にも乱闘を始める勢いだったが美緒がやって来た。
美「二人共！何やっとるか！」
？「少佐…」
悠「美緒か…」
美「一体どうしたんだ？」
悠「その前にこいつ誰だよ？」
俺は気になっていた事を美緒聞いた。女の人は俺の方をずっと睨んでいるけど。
？「貴様にこいつ呼ばわりされる覚えは無いんだがな？」
悠「あんたが名乗らないからだろう？」
？「普通、自分から名乗るものだがな？」
こいつ、さっきから挑発して来やがって！
悠「突っかかって来たのはそっちだろが！」
キレそうな俺を美緒は止めた。
美緒「落ち着け、悠里。彼女はバルクホルン大尉、
この５０１のエースの一人だ」
？→バルクホルン「ふん！」
バルクホルンと呼ばれた奴は鼻を鳴らした。
美緒「バルクホルン、こいつは新しく５０１に配属された木ノ本悠里大尉だ」
バ「なるほど、こいつが例の」
バルクホルンは俺をじろじろ見てくる。
バ「信じられんな」
悠「んなぁ！どうゆう事だよそれ！」
バ「ありのままを言っただけだが」
バルクホルンは俺を睨み付けそう言ってくる。
美「喧嘩はするな二人とも！」
さすがに、怒った美緒。

バ「すみません、少佐」
美「認めないのは勝手だが部隊のモチベーションを下げる事はするな」
バ「以後、気を付けます。訓練があるのでこれで、失礼します」
そう言い、バルクホルンは俺の前から立ち去って行った。

バルクホルンが去り、廊下には俺と美緒が残った。
美「すまんな、悠里。バルクホルンは真面目過ぎるんだ」
悠「あれは、堅物すぎだろ？」
美「そう言うな。彼女にはああなる理由があるんだから」
悠「戦う理由ってことか？」
美「そうだ、しかし、これはまた今度だ。お前は行くところがあるだろ？」
悠「そうだった、ボブさんに呼ばれてたんだ！
それじゃ、また後でな！」
美「ああ、わかった」
そう言い俺は美緒と別れ格納庫に向かった。

～格納庫～
悠「ふぅ、着いたぁー」
格納庫に着いた俺に気付き、ボブさんがやって来た。
ボ「遅かったな、悠里」
悠「いろいろとありまして」
俺は事の全容をボブさんに話した。
ボ「なるほどな、まぁ、心配するな。いざって時には俺達もいる。きっとうまく行くさ」
悠「そうだといいですけどね。それで俺に話したかった事って何ですか？」
ボ「それはだな、あい…」
ボブが言おうとすると声が聞こえた。
？「おやっさーん!!」

ボ「きたか」
悠「誰っすか？」
？「何？どったの？おやっさん？」
駆けて来たのは青いつなぎ姿の女性だった。
ボ「アニー、お前にこいつを紹介したかっんだ
こいつは悠里、新しく新設されたＭＳ隊の隊長だよろしくやってくれ」
悠「木ノ本悠里です！よろしく！」
ア「あたしはアニー・ブレビック、おやっさんの一番弟子さ！」
ボ「さて、紹介も済んだ事だし、そろそろ本題に入るか」
悠「なんすか？本題って」
ボ「さっき、本部から連絡があってな、そろそろ試験機体と通常運用の機体が届くそうだ」
悠「ついに、来たか…」
ボ「明日にでも使える状態に仕上げる。お前さんはもう上がれ。行くぞ、アニー」
悠「わかりました」
ア「へーい、こりゃ、寝れんかもね…」
悠「ついに、始まるんだな…俺のここでの、最初の任務が！」
そして、悠里にとって初めての正式な部下が配属される事になる。